

世界経済・金融市場動向（日本）

先月の振り返り

01 日本株式市場

10月の日経平均株価は大幅上昇しました。上旬は9月株式市場の大幅下落からの反発によって株価は上昇しました。中旬は米国金利が上昇したことや中国共産党大会への警戒感の影響で株価は上げ幅を縮小しましたが、下旬にかけては米国株の急伸や円安効果等を背景とした好決算企業株を中心に買い優勢の展開となり、大幅上昇しました。

02 日本債券市場

10月の日本長期金利は横ばいとなりました。前半は欧米諸国の積極的な金融引き締めの影響で日本でも超長期ゾーンを中心に金利が上昇しましたが後半にかけては米国金融引き締めペースの鈍化観測から上げ幅を縮小しました。こうしたなかで、円安が再び急速に進行したタイミングで財務省は過去最大規模の円買い介入を行いました。

経済金融環境

01 日本経済環境

企業短期経済観測調査（日銀短観）では、行動規制の緩和等から非製造業は上向くものの、製造業においては原材料価格等の高騰により3四半期連続で悪化傾向を示しています。

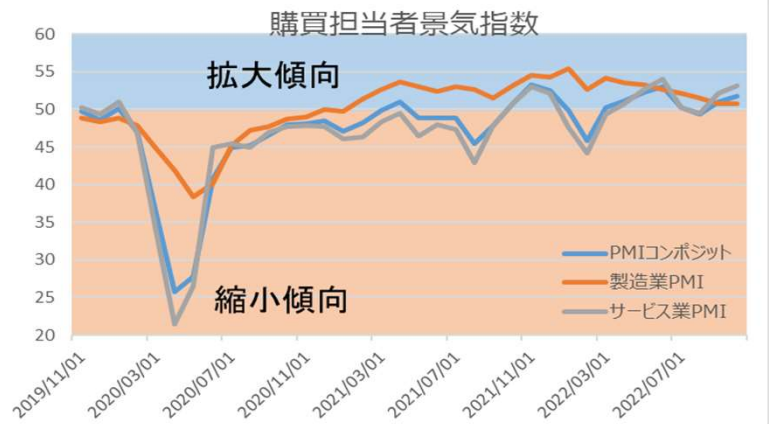
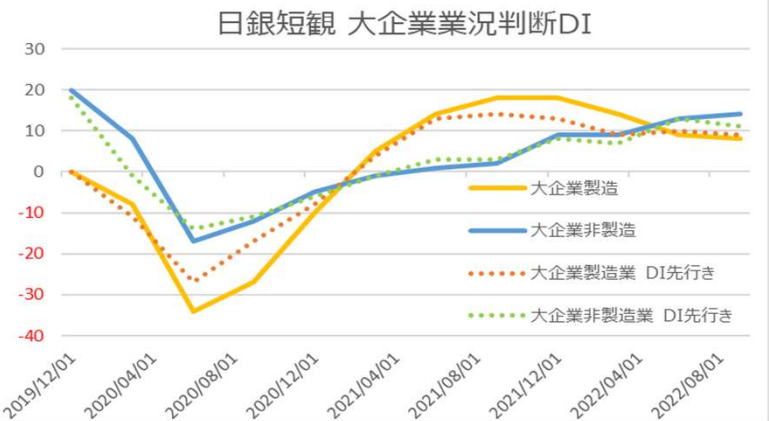
また、購買担当者景況指数においてもサービス業センチメントは上向く一方で、製造業センチメントは分水嶺である50を上回るものの悪化傾向を示しており、今後の景気動向には注意が必要です。

今後の見通し

01 日本株式市場

日銀が金融緩和姿勢を維持していることや政府による大規模経済対策・水際対策の緩和等を背景に経済再開への期待感から株価は相対的に下支えされると考えます。

一方で、米国の景気後退や雇用悪化が顕著になり米国金融引き締めの方向転換がみられた場合には、急速に円高が進行し企業業績への下押し圧力がかかりやすく、株価は軟調な展開になると予想します。



(注) データ期間：2019/11/1～2022/10/31  
(出所) Bloombergのデータを基にFDA作成

02 日本債券市場

日銀が金融緩和政策を継続する意向を示していることや、指値オペ等の活用により長期金利の上限を0.25%に抑圧していることから、イールドカーブコントロールの上限付近での推移が継続すると見込みます。ただし、海外中央銀行の利上げペース鈍化等を背景に海外の長期金利が下落する局面においては、日本でも同様に金利が低下すると想定します。

世界経済・金融市場動向(米国)

先月の振り返り

01 米国株式市場

10月のS&P500指数は大幅上昇しました。前半は堅調な労働市場やインフレの高進が確認されたことで、FRBによる積極的金融引き締め継続による企業業績への悪影響が意識され株価は上値の重い展開となりました。後半は、英国財政への懸念後退や想定されていたほど悪くない米企業の決算、米国金利がやや低下し企業業績への下押し圧力が和らいだことから株価は急上昇しました。

02 米国債券市場

10月の米国長期金利は上昇(価格は下落)しました。上旬は、ISM製造業景気指数が市場予想を下回り景気後退が意識され金利が低下しました。中旬は、米コアCPIが上振れたことで金利は大きく上昇しました。下旬は、英国を端とした欧州の金融システムリスクが落ち着いたことやFRBが年内に利上げペースを鈍化させるとの観測が浮上したことから金利は上げ幅を縮小しました。

経済金融環境

01 米国経済環境

7-9月期GDPは3四半期ぶりにプラス成長に転じ、米国経済の底堅さが確認されました。

一方で、シカゴ連銀が算出する金融状況指数では、年初より金融状況の引き締めが急速に進展しており、今後の実体経済への悪影響には注視が必要です。

今後の見通し

01 米国株式市場

米国労働市場が引き続き底堅く、インフレ動向にも落ち着きが見られていない現状では、FRBは金融引き締めを継続すると考えられます。それに伴うドル高等の影響で輸出関連企業を中心に業績には下押し圧力がかかりやすく、株価は上値の重い展開を想定します。

中間選挙後の政権運営および経済指標動向次第で金融政策見通しの変動性が高まりやすく、株価においてもボラティルな展開を見込みます。



(注) データ期間：2019/11/1~2022/10/31  
(出所) Bloombergのデータを基にFDA作成

02 米国債券市場

FRBによる金融引き締めペースについては今後鈍化が予測されている一方で、ターミナル金利(政策金利の最終到達点)は上昇が見込まれ始めているため、堅調な米国経済指標が続く限り、金利は上昇しやすい地合いと考えます。他方で、これまでの金融引き締めによる累積的影響が顕在化し急速にインフレの沈静化や雇用環境の悪化がみられた場合にはターミナル金利低下の思惑から金利が急低下する可能性もあると考えます。